

芳野

シテ	ワキ	後	前	ワキ
子守	前に同じ			紀貫之
明神				老翁

「花の雲路をしるべにて。／＼。吉野の奥を尋ねん。

詞
「抑是は紀貫之とは我事なり。我いまだ三吉野を見

ず候ふ程に。此春思ひ立ち吉野参詣仕り候。

道行
「三吉野の。象の山風長閑にて。／＼。分け入る影
にそなれ行く。松の響も朝立つや。雲も桜も一色
の。吉野の山に着きにけり。／＼。

シテ、ツレ一声
「みよしのゝ。山辺に咲ける桜花。雪かとも見る梢
かな。

ツレ
「重き薪を老の身の。

シテ
「花とも知らぬ心かな。

サシ二人
「古里の吉野は花に住みあかで。春を友なる山賤の。

採るや薪のしばくも。あはれんものかと思ひし
に。定めなき世の中々に。住めば住まるゝ身なり
けり。かくてもいつと限らまし。

歌
「春の山辺に行き暮れて。／＼。木のもとに立ちよ
れば。嵐もつらし花もうし。／＼。

「いかに是なる山賤。御身は此吉野山に住み給へば。
賤しきながら心にくうこそ候へ。然れば此吉野山。

何くも花の名所なるべし教へ給へ。

シテ
「御姿を見奉れば。何とやらん此あたりの人とは見え給はず。若し都より御参詣候ふやらん。

ワキ
「実によく見給ひたり。是は紀貫之なるが。初めて

参詣申して候。

シテ
「何と紀貫之にて御座候ふとや。

ワキ
「中々の事。

シテ
「かしこうぞ長いきして。天が下に隠れもましまさぬ歌人紀貫之を見奉る事の有難さよ。よくく思へば是もたゞ。名所に住める故なりけるぞ。唯尋常の山里ならば。歌人もいかでか御入り有るべき。實にや頃しも吉野の花の。ひとへに名所の徳なるぞや。

ワキ
「實にや勸学院の雀は蒙求を囁るとかや。さしも賤

しき山賤なれども。名所の人とてかくばかり。心
言葉のやさしさよ。さらば老人此まゝにて。吉野
の奥のしるべせよ。

シテ
「しるべはあらじ都にても。吉野の花は御覽ずらん。

地
「千本の花に嵐山。音に聞えて皇の。治めし三吉野
や。種とりし外までも。花は吉野の名ぞ高き。実
にやさしもこそ。厭ふ浮名の嵐山。花の所と成り
そめし。時の春さへ面白や。く。

ワキ詞
「近頃心ある山賤にて候ふ間。いで貫之歌物語して
聞かせ候ふべし。

シテ
「さらば承り候はん。

クリ地

「夫れ敷島の国つわざは。天の浮橋の下にして。二
柱の神代より。起り伝はる道とかや。

ワキサシ
「抑大和島根の内に置きて。百千の君の政を助けし
より。

地
「明らかき時にはかならず是をおこし。治まれる世

にはしきりに之を集め給へり。

「實に目に思ひ心に見て。

ワキ
地 「うつし顕はす言の葉の。直きを先として其くせな
きが如しと。歌人も詠吟しけるとかや。

クセ
「難波津の。流は浅くして。底をばかり難く。浅
香山の道はまた。狭くして際を知らざりき。水無
瀬川の霞のうちに。秋のあはれを忘れ。高円山
の風の前。雲なき月を望みつゝ。おどろが下葉を
踏み分けて。道ある世をしらせんと。闇のふすま
の冴ゆるにも。藁屋の風をあはれみの。恵みなれ
や大君の。御心内に動き。詞外に満つとかや。

ワキ
「龍田川のもみぢ葉は。

地 「濃きもうすきも錦にて。吉野の山桜は。嶺にも尾
にも雲の端の。かゝる詠めは尽きぬ世の。君も人
も身をあはせ。心をのべて花衣。野べの葛のはひ
かかり。林にしげき木の葉の。天長く地久に。幾

万代の道ならん。

ロンギ地

「実に奥深き三吉野の。花の下道踏み分けて。山の
あなたのしるべせよ。

シテ、ツレ

「しるべとも。いづく岩根の松の葉の。白きは雲か

花の雪の。幾代積りて年浪の。帰る方を御覧ぜよ。

地 「帰るやいづく三吉野の。吉野の奥のしるべとて。

二人 「行かんとすれば花盛り。

地 「咲き埋れて。

二人 「吉野山。

地 「出でつる道だにも見えねども。去年のしをりをし
るべにて。花を分けつくざりつゝ。さながら雲に子
守の。神よとて失せにけり。神よとて失せにける

とかや。 (中入)

「声よりやがて松の風。 く。 のどかに吹きて夜
桜の。光りかゝやき音楽の。花に響くぞ有難き。
く。

ワキ歌

後ジテ

「あら有りがたの和歌の人や。誠に発心説法の妙文。
せんせいなれや久方の。天よりおこる詠歌の道。

地 「昔に帰る舞歌の例。

シテ 「是ぞ此五節のかなでの神。

地 「左右左左右さかゆくや。花の遊樂夜も更けて。月
澄み渡り。松風も静かなる。花の梢に天くだる粧
ひ。實に目前のめうふうを顕はす。

シテ 「姿も妙なるや。

地 「姿も妙なるや。昔の神女の舞の袖。返す五節の例
の。尽きもせず朽ちもせぬ。此金峯の神慮を。見
聞くにつけてめでたき。此遊楽の妙文。真如実相
の月の夜。明くるや名残なるらん。く。